

## 学 位 論 文 要 旨

氏 名 田 中 直 子

## 題 目 史料・記録から辿る寺宝の保存・整理と認識 ―近世以降の醍醐寺を中心として―

本研究では、「寺宝」の保存・整理と認識が、江戸時代から明治時代にかけて、どのように変遷したのかを、文字史料および記録を辿り、醍醐寺を中心に跡付けることを目的とする。本研究は、表背墨書を歴史史料として扱う新規の試みであり、寺院を主体とする寺宝の認識の変遷に視点をおく点で独創的である。

第一章及び第二章においては、近年明らかとなった醍醐寺の320件、600点を超える仏画の表背墨書を、近世において醍醐寺の復興に寄与した二人の座主、第80世義演（生没年1558～1626年）と第86世高演（生没年1765～1848年）に着目して分析・検討し、江戸時代の仏画の保存修理事績の総体を示した。第一章では現在確認できる義演の修理事績41点について、特定の時期への集中から4期に分類した。第1期には、自身の僧侶としての立場の確立（印信を賜り、同年准三宮勅許を受ける）、第2期は、勅命による法要、第3期には寺領安堵や徳川家との縁戚関係などの醍醐寺の社会的・経済的安定、第4期では後継の育成といった背景を示し、保存修復に向かう動機を明らかにした。

第二章では、高演と係りのある仏画の保存修復事績26点を整理し、3期に時期区分を行った。まずは高演の生没年を明らかにした上で、各時期における修復の動機を分析した。各時期には、①三宝院流相伝の意識、②寺院の什宝意識、③修復の動機と背景、という三つの視座が指摘でき、それぞれの視座における背景には義演との共通性が認められた。

第三章及び第四章においては、詳らかでない醍醐寺の近代について、京都府行政文書を史料とし、寺院調査を網羅的に収集・整理することで、「寺宝」の整理や認識の変化を示すとともに、明治時代の醍醐寺の変遷を辿った。なお、文化財保存に関する最初の法律とされる古社寺保存法を一つの区切りと捉え、明治30年代迄を調査対象とし、該当史料18件から醍醐寺に関連するものを抜粋し、3期に区分した。第三章では、第1期及び第2期を扱った。第1期（明治3年～同15年の5件）は、上知のための醍醐寺の院家や住侶の把握を主な目的としており、醍醐寺と三宝院は別の寺院として考えられていた。門跡の廃止も相まって醍醐寺は疲弊するが、明治8年の『二十三院由緒書』を契機に歴代門跡の由緒と履歴、寺院の歴史的価値が見直される。第2期は、明治16年～同17年の3件であり、調査の移行期と位置付けた。特に明治17年の『四百年前社寺建物取調書』については、建物の調査に修履歴が追加された。この「四百年前」は、フェノロサが同15年に講演で論じた東山文化の事と考えられ、美術的概念の適用を指摘した。

続く第3期（明治18年～明治32年の6件）は、第四章において論じた。この時期は調査の題名に「美術」が採用され、寺宝の美術や人民宝物といった価値への認識の変化を特筆できる。

第五章では、醍醐寺の寺宝に関する歴史・美術調査の詳細と、寺内の主観的な記憶史料を併せて考察した。その結果として、寺院の主観は法流の存続を優先しつつも、社会の需要に応じて柔軟に認識を更新させていく醍醐寺の姿勢を示した。

終章の第一節においては、本論の結論として、近世における仏画の保存修復が、法流の継承を前提として行われ、それゆえに重宝として認識されていることを明確にした。また保存修復には、歴代座主の地位の確立、経済的基盤の構築、後継への相承といった節目が動機となることを示した。その上で表背墨書が、義演や高演についての営みを跡付ける総体的な史料として位置付けられ、さらに法要や相伝に係わる歴史を記録蓄積するアーカイブズ的性質を有することを指摘した。

また明治時代の寺宝調査の検討を通して、寺宝の認識が、近世の累代相承という由緒の喪失を経て、近代的な歴史・美術的価値へと変遷する様子を明らかにした。それは同時に秘匿性から、人民の宝としての公開性への変遷でもある。その過程において、近世の座主が行った整理・保存は部分的に解体を余儀なくされた。

終章の第二節においては、本論の展望として、博学連携における醍醐寺の京都市立醍醐中学校を対象とした文化財の鑑賞授業の実践を示した。本実践は、事前授業・鑑賞授業・事後の制作という3つの過程の全てを教員と学芸員が連携し、3年間で学びを深める点において独自性がある。事前事業は社会科を主軸として、歴史的な見方・考え方を育み、国際的な視野で多文化理解に資することを目的とする。特に3年生の事前授業では、本研究成果である醍醐寺の近代化の前後における変遷を教材と

し、歴史的建造物の小学校利用、上知された土地に建つ中学校や生徒の家を、その推移とともに捉えることで、地域の変化と文化財保存について、多角的な視野を育むものとした。それにより、学習者は文化財保存に対する独自の多角的な知見を持つ。さらに本実践を通して文化継承の意識や、地域への関心も向上することを示した。